

親鸞仏教センター通信

2006.
December

2006年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第20号

欲 望 の 矢

親鸞仏教センター研究員 羽 塚 高 照

2002年に出版された『百年の愚行』(Think the Earth Project、紀伊国屋書店)という写真集がある。およそ100点の写真により、その写真集がわれわれに突きつけるものは、人類が過去100年の間、自然環境や自分たち自身、そして何よりも自分たちの子孫に対して及ぼした、まさに「愚行」としか言いようのない現実の姿である。

水質汚染により奇形化した魚、流出した重油にまみれたペンギン、煙を吐き出す煙突、皆伐された森林、核廃棄物、密猟のため殺されたサイ(犀)、大量のゴミ、爆弾の雨、地雷、強制収容所の犠牲者たち、配給を待つ難民キャンプの子どもたち。それぞれの写真は、あらためて私に考えさせる。「人類はとんでもない間違いを犯している」と。

「戦争はいけない」「自然を大切に」「差別はいけない」、それはわかっている。誰もが当たり前だと思っていることだ。にもかかわらず現実には、いまこの瞬間も、世界では戦争が起こっており、貧困のために命を落とす人たちがいる。政治、経済、科学、人種、宗教。問題が複雑に絡み合っているなかで、いまま進行中の愚行に対して、いったいどうすればいいのだろうか。その写真集の巻末に、「これからの100年に向けて」という文章が載せられている。その文章の末尾には、唐突に、次のようなブッタの言葉が引かれている。

子のある者は子について憂い、また牛のあるものは牛について憂う。実に人間の憂いは執着するもとのものである。執着するもとのものがない人は、憂うことがない。

(『ブッタのことば スッタニパータ』中村元訳、岩波文庫)

ブッタは繰り返し説いている。欲望を捨て去りなさい、怨みの連鎖を断ち切りなさい、心に刺さった欲望の矢を抜き去りなさい、「わたし」「わたしのもの」というとらわれを捨てなさい。そう、確かに、人類がお互いに自らの欲望を捨てて、自我を主張することをやめれば、地球はいまよりももっと住みやすくなるかもしれない。しかし、それはあまりにも現実離れた夢にすぎないのではないか。人類は、ブッタのその呼びかけを無視し続けてきた、そんな歴史をずっと繰り返してきたのだから。

それでも私は信じている。仏教は、善と悪の二元論や、エゴとエゴとの対立や、怨み、憎しみ、悲しみ、その他すべての困難を乗り越えていくことができる道を示してくれている、と。何もかも無自覚に受け入れることをやめ、立ち止まって、欲望の矢が突き刺さった自分の心を見つめること。どんな時代であろうとも、私たちはそう主張し続けなければならないと思う。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」

浄土—苦悩の衆生のこの場所で、
無限大悲のはたらきを感じ—

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、第50回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。本講座は、2001年11月から「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」と題して天親菩薩の『浄土論』をめぐる行われてきたが、このテーマについては、この回をもって最終回を迎えることとなった。

第51回（2006年11月）からは、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」をテーマに新たな講座が開講された。ここでは、第50回からその一部を紹介する。（越部良一）

■「濁世を超えて、濁世に立つ」

この講座も回を重ねて50回、別に回を定めるつもりはなかったのですが、ちょうどこの『浄土論』の最後の回が、区切りのよい回数になりました。『浄土論』の偽文（げもん）をとおしながら、「浄土」という問題を、現代という時代において自分がどういたしていけばいいのか、いま、ここに生きていることにとってどういう意味があるのかという関心で、親鸞聖人の「顕浄土真実（あらかた）」、浄土の真実を顕すという、そういう深い要求を少しでも掘り下げてみたい。そういうことがあって、このような場所でお話をさせていただいてきました。

親鸞は、『浄土論』を「正信偈（しやうしんげ）」に取り上げられていて、「光闡横超（こうせんおうちやうだいいせいがん）大誓願（だいせいがん）」には広く開くという意味があって、「横超（おうちやう）の大誓願（だいせいがん）」を広く開示する、そういう内容を孕んでいるのが『浄土論』であると。つまり、『無量寿経』の本願の意味を『浄土論』はあらわしたのだと読んでおられる。次回（第51回）からは、その『無量寿経』をいただいきたいと思っています

ますが、『無量寿経』という経典を親鸞聖人はどう読まれたかということ、「如来の本願（みようこう）を説き、経の宗旨（しやうち）とす。すなわち、仏の名号（みょうごう）をもって、経の体（たい）とするなり」（『教行信証（きやうぎゆしんしやう）』「教のまき巻（まきまき）」『真宗聖典（しんしゆせいでん）』152頁、東本願寺出版部）と。本願を説くことが、経の中心問題であり、その具体的な形は南無阿弥陀仏、名号であると。このことを、『浄土論』もまたあらわしているというのが、親鸞聖人の『浄土論』の理解です。

本願は、形なき願いと言いますか、限らない衆生に、限りなく呼びかけて、無限大悲の救いを与えたい。そのときに、その呼びかけ方として、常に光り輝き、いのちが無限であるような如来の名を念ぜよ、思い起こせよ。そういう方法と呼びかけて、無限なる願いを内に掘り下げていく道を開いた。浄土は、そういう願心の象徴であって、形なき願いを衆生に呼びかけるための形である。衆生の苦悩（くるなう）に応じて、苦悩なき世界を呼びかけるという形で、浄土をあらわす。

人間の側に無尽蔵（むじんざう）の苦悩があるのならば、無尽蔵の功德として浄土を語ろうとする。ですから相対概念です。この苦悩の生命を完全に克服できるような世界として、この現実の苦悩の生命とは根本的に異質の世界を語りかける。何かこの世とは違う、断絶された世界として語る。だから、浄土は死んでから往くとか、十万億土（じふいふじき）の彼方（あなただ）であるとかと言われたりもするわけですが、しかし、この呼びかけの意味は、苦悩の生命を捨てて、違う世界に行ったらたすけてあげようというようなことではない。苦悩の衆生のこの場所で、その苦悩の衆生をたすけたい。この世に生きているわれわれの世界を、仏法（ぶつぽう）は「五濁（ごじやく）」と言いますが、自分の外側（ぐわいそく）が濁って

いるというような他人事ではなく、まさに濁りの中に生きている。しかしその濁りを逃げずに、その濁りの中にしっかりと立つことができる。そういう原理を、本願はわれわれに呼びかけている。こういうことを話の根に据えて『浄土論』をいただいてみようというのが、「濁世を超えて、濁世に立つ」という題の意味です。

■ 人間の根本問題

そういうことで『浄土論』をいただいてきたわけですが、このようにお話をして、聞いて喜んでくださる方がいるのは大変ありがたいのですが、わからないという方も多いのです。いつも思うのですけれど、わからない話をしているのです。わかるように言おうとするのですけれども、言えば言うほどわからない。わかるというのではなくて、何か感ずるのです、本願のはたらきを。本願は、わかって語るのではない。つまり、無限はわからないでしょう、われわれは有限なのだから。でも、単に有限なのではなくて、無限の中にあるから有限なので、無限のはたらきを感じずるわけです。無限のはたらきというのは、いくら語ってもこれはわからないのです。それは、不可解というのではなくて、「不思議」なのです。不可解というのは、ただ考えてわからないということ。不可思議というのは、考えても絶対わからないけれども、何か感ずるのです。もうちょっと聞きたい、もうちょっとたずねたい、と。その、たずねさせるはたらきが本願なのです。

好奇心であつたら、もっと興味のあるものがいっぱいあるでしょう。好奇心には、つまらない話はだめです。こういう話はあまり興味がありません。でも、人間は気になるのです。根本問題ですからね。根本問題というのは、なかなか触れられないのですけれども、本当にこれに触れると、何かゆったりする。価値観が変わるのです。人間はエリート意識とコンプレックスとで、ぐしゃぐしゃになっているのです。それが解きほぐされて、「そういうものは、人間の根本問題ではないのだ」と、そういうふうに世界が悠々と感じられてくるのです。ですから、

ますます窮屈になっていく現代に、一呼吸できる空間が、南無阿弥陀仏の空間なのかなと、そんなふうに思っています。

まあ、この東京国際フォーラムという超モダンな建物、初めは仏法の話をするような空間ではないかなと思ったのですが、こうやってできるのですから、どこでもできるわけです。「仏法のない世界はない」というのは、本当なのでしょう。ただ話し難いとか、なかなか聞いてもらえないということは、もちろん深刻な問題としてあって、比喩的に言えば、耳に栓をするような時代になっている。みんな耳に何かくつつけて、違うものを聞いている。そして忙しい時代、走り回っている時代ですから、じっくりと宗教問題、自己の根本問題を、一日1分でも憶念するということができなくなっている。でも、南無阿弥陀仏は、そんなに時間は要りません。ふっと思立って、そこに還っていく世界を感じずるのです。方法として、座禅のように足も痛くなりませんし、お腹も減りませんしね。ただ、聞き難いのです。意味がわからない。これは、聞いていただくしかないのです。これをご縁に、また根本問題に、一人でも触れていただけたらと、切に思うことです。

(文責：親鸞仏教センター)

※講座記録は、『現代と親鸞』第12号に掲載予定。

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

2006年11月から、新テーマ「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」がスタートしました。どなたでも聴講（無料）いただけますので、ご参加ください。

記

日時：2006年12月15日(金)午後6時30分～9時
2007年1月16日(火) 同上
2月15日(木) 同上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

参考図書：『真宗聖典』（東本願寺出版部発行）

ご希望の方は、下記まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

とげそうろうべくは、ひとのいのちは、いずるいき、いるいきをまたずしておわることなれば、回心もせず、柔和忍辱のおもいにも住せざらんさきにいのちつきば、摂取不捨の誓願は、むなしくならせおわしますべきにや。

くちには願力をたのみたてまつるといいて、ころには、さこそ悪人をたすけんという願、不思議にましますというとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまわんずれとおもうほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらするところかけて、辺地の生をうけんこと、もつともなげきおもいたまうべきことなり。

信心さだまりなば、往生は、弥陀に、はからわれまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず。

わろからんにつけても、いよいよ願力をあおぎまいらせば、自然のことわりにて、柔和忍辱のころもいでくべし。

すべてよろずのことにつけて、往生には、かしこきおもいを具せずして、ただほれほれと弥陀の御恩の深重なること、つねはおもいいだしまいらすべし。

しかれば念仏ももうされそうろう。これ自然なり。わがはからわざるを、自然ともうすなり。これすなわち他力にてまします。しかるを、自然ということの別にあるように、われものしりがおにいうひとのそうろうよし、うけたまわる。あさましくそうろうなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

う息を待つことなしに終わるものだから、回心もしないで、穏やかで受容的なところになる前に、いのちが終わってしまえば、阿弥陀如来の摂め取って捨てないという誓いは、無意味になつてしまふのであらうか。

口には、「人間の思いを超えた阿弥陀の本願力にすべてを任せます」と言いながら、こころの奥底では「悪人をたすける本願がいかに不思議であるとはいっても、やはり善人をこそたすけるのだらう」と思い込んでしまう。そのひとは本願力を疑い、他力をたのむところが欠けているので、辺地に生まれることになり。これこそ、最も歎かわしいことだと思わなければならない。

ひとたび信心を獲得したならば、浄土への往生は、ひとえに阿弥陀如来のはたらきで決まることであるから、人間の側の是非・善悪が関わることはない。

自分はどれほど悪い存在だと思えても、いよいよ阿弥陀の本願力を仰ぐならば、おのずから穏やかで受容的なところも生まれてくることだろう。

いついかなる時でも、弥陀の浄土へ往生するについては、こざかしい思いをまじえず、ただほれほれと、阿弥陀如来のご恩の深いことを、いつも思いだすべきである。

そうすれば、おのずから念仏も称えられることだろう。これは、「自然」である。人間の作為や打算をまじえない、本願力のおのずからなるはたらきであるから、「自然」というのである。これを「他力」という。それなのに「自然」が、本願力のはたらき他にあると、物知り顔で言うひとがいて聞いている。まったく歎かわしいことである。

語 註

①「辺地」方便化土の別名。浄土の救いにふれながら、それが自分が努力して得たと思う意識の閉鎖性を批判するための象徴的表現(「第十一条」の語註(「辺地懈慢疑城胎宮」通信「第十二号」を参照)。

②「自然」(「第六号」の語註(「通信」第八号)を参照)。

③「他力」(「序」の語註(「通信」創刊号)を参照)。

(訳・語註・親鸞仏教センター)

『anjalī』第12号および

『現代と親鸞』第11号を刊行

このたび、『anjalī』第12号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第11号(写真下)を刊行しました。

『anjalī』第12号では、写真家の本橋成一氏、平和活動家の相馬雪香氏、広島大学学長の牟田泰三氏、駒沢大学名誉教授の佐々木宏幹氏、文化人類学者の上田紀行氏、医師の永尾雄二郎氏、関西商品取引所市場取引監視委員長の高橋弘氏、東京芸芸大学教授の山田昌弘氏、名古屋市立大学助教授のランジヤナ・ムコパディヤヤー氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第11号では研究論文のほか、「現代と親鸞の研究會」から、社会学者の橋爪大三郎氏、教育学者の佐藤学氏の問題提起と質疑、「清沢満之研究會」から、新潟大学副学長の深澤助雄氏の講義と質疑。また「親鸞思想の解明シンポジウム」から、物理学者の國府田隆夫氏の講演、放送衛星システム参与の斎藤勝治氏と本多弘之所長の提言。さらに、本多所長の問題提起(五講座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

第十六条には、「回心えしんということ、ただひとたびあるべし」と記されている。この「ただひとたび」をどう読むかが問題である。「一回限り」と読めば、体験が特殊化し、神秘化する。特殊な状態に置かれると人間の精神は、誰しも容易に「神秘体験」を起こす。そのような特殊体験を「回心」というわけではなからう。

「ひとたび」とは、一生涯を貫く概念ではないか。それは、過去のある時点に起こった特殊体験を反芻することではない。いつでも、へいま、体験しつつあるというような体験内容であらう。もし、既知の体験となってしまうえば、そこには感動も驚嘆も起こりはしない。決して、過去の特特殊体験として語ることを許さないものが「回心」であらう。

（元囑託研究員・武田定光）

『歎異抄』試訳 第十六条

原文

信心しんじんの行者ぎやうじや、自然じねんに、はらをもたて、あしざまなることをもおかし、同朋どうぽう同侶どうりよにもあいて口論くろんをもしては、かならず回心えしんすべしということ。
この条、断悪修善だんあくしゆぜんのここちか。一向専修いつこうせんじゆのひとにおいて、回心えしんということ、ただひとたびあるべし。

その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀みだの智慧をたまわりて、日ごろのころにては、往生おんじやうかなうべからずとおもいて、もとのころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、回心えしんとはもうしそうらえ。

一切いっけつの事に、あしたゆうべに回心して、往生を

現代語訳

本願を信じて生活しているひとが、思わず腹を立てたり、悪い行いをしたり、あるいは仲間と口論などをしたときには、必ず回心すべきであると発言することについて。

この主張は、悪を断ち切り、善を行って浄土に生まれようとする心境から出てきたものであろうか。ひたすら念仏のみに生きるひとにおいて、回心ということ、生涯に二度とない出来事なのである。

回心とは、つね日ごろ、本願他力である真実の教えを知らないひとが、阿弥陀の智慧をいただいて、いままで抱いてきたころでは浄土へ往生できないと思い知らされ、この自力のころをひるがえして、本願に全身を任せることである。それをこそ、「回心」というのである。

もし、すべての出来事に対して、そのたびごとに回心して、往生を遂げるというのであれば、ひとのいのちは、吐く息が吸

親鸞仏教センターの動き

（2006.9.1）一抄出

- 2006年
- 9・1 「親鸞仏教センター通信」第19号を発行。
第79回英訳「教行信証」研究会、第22回研究会議（研究・交流・出版の企画検討）
 - 9・8 親鸞聖人ご命日のつどい
第28回現代と親鸞の研究会「都市の記憶を継承する―イタリアに学ぶ修復型都市再生」建築家・民間順朗氏
 - 9・18 学会発表（春近教輔託研究員「普及福音新教伝道会の真宗観」、日本宗教学会第65回学会大会・東北大学）
 - 9・19 第48回清沢満之研究会、第15回英訳「教行信証」グロッサリ研究会
「聖典」の試訳（現代語化）第1回「唯信鈔文意」研究会
 - 9・29 親鸞聖人ご命日のつどい
第49回清沢満之研究会、清沢満之における宗教と倫理、東京大学大学院教授・末本文美士氏
 - 10・14 学会発表（山本伸裕、託研究員「清沢満之の『宗教道徳』論」、日本倫理学会第57回学会大会・東京大学）
第6回英訳「教行信証」再版編集会議
 - 10・22 第4回「親鸞思想の解明」シンポジウム。講演「『救済の生命場を求めて―科学と宗教の出会い―」清水博氏（東京大学名誉教授・場の研究所）所長、提言「本多弘之所長」
親鸞聖人ご命日のつどい
 - 10・31 第1回（通算第51回）公開講座「親鸞思想の解明。新たに、テーマ「浄土を求めさせたもの」―大無量寿経―を読む」を開催。
第81回英訳「教行信証」研究会「真宗を英語で表現することの課題と可能性」ロンドン仏教協会理事・佐藤平氏、助言者・下田正弘氏（東京大学大学院教授）
 - 11・29 第29回現代と親鸞の研究会「現代社会に親鸞思想は応え得るか」ドクメンタリイ作家・森達也氏、社会評論家・芹沢俊介氏
 - 11・30 第2回研究員と読む公開読書会「いま新たに聞く―フツダ・法然・清沢満之の世界―（他力門哲学）の論文を読む」①11/30 ②12/7 ③12/13 ④12/20（文京区・東京大学仏教会館2階ホール）
 - 12・1 「聖典」第12号、「現代と親鸞」第11号、「親鸞仏教センター通信」第20号を発行。

現代と親鸞の研究会・第21回

医療と仏教

佐藤第二病院医師 田畑正久



田畑正久氏

2006年2月1日、東京ガーデンパレス（文京区）において、医学界から田畑正久氏（佐藤第二病院医師）を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。医療と仏教はともに生・老・病・死を問題にする。しかし、老・病・死は克服できるものなのか、できないものなのか、その視座をはっきりしなければならないと田畑氏は言われる。本来の医療には仏教が不可欠であるとの信念をもつ田畑氏に、これからの医療について語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ 医療と仏教の関わり

医療が人間を救うのか、仏教が人間を救うのかということを考えたときに、医療は老・病・死を先送りにするという限界があると思います。そして、仏教が「生死を超えろ」と教えていることのすごさをあらためて思いました。

生死を超えろということを、医学は「不老不死」というかたちで追い求めています。結局は壁があり、限界があるわけです。現代医学で、できるだけ先延ばしするというのも大事だと思いますが、それだけにとられるのではなく、「生死を超えろ」という世界への気づきということが、より大事であると思います。

いまは、医療のほうが何か大きな顔をしています。仏教のなかの部分的なものが医療ということではないか、包含関係で言うならば、医療は仏教のなかに含まれていると思います。

人間の苦悩は、私の現実と私の思いに差があるということ、そして、その差が苦悩の原理となっています。この「差を縮める」というのは、一つは、現実を思いのほうに近づけるということと、もう一つは、思いが自分の現実を受容していくということです。

そのような問題に関連して、現代医療のなかに、spiritual（スピリチュアル）という問題が入ってきました。私は、spiritual というのは、「後生^{ごしょう}の一大事」と言われることと、かなりオーバーラップしていると思います。人間に生まれた意味、生きることの意味、死んだらどうなっていくのか、これらの解決が自分なりに本当に^{うなず}頷^{うなず}けているのかということです。spiritual ということでは言われていることは、真宗ではずっと問題にしてきました。そういうことへの^{うなず}頷^{うなず}きをもっていることが、人間としての健全さではないかと思います。

EBM（Evidence Based Medicine 客観的な根拠に基づいた医療）と NBM（Narrative Based Medicine 物語に基づいた医療）との二つによって、初めて本当の全人的医療が成り立つのではないのでしょうか。EBM に関しても、もう一度じっくりと事実はどうなのかということを見て、患者さんがどういう人生を生きたいのか、その人の病気観や価値観などの人生観と、客観的な事実を合わせて全体を見ていくことが大事なのです。

まさに仏教は、人間に生まれた意味、生きる意味、死んだらどうなっていくのか、という普遍性のある物語を提供していると思います。そういう意味では、この物語に基づいた医療に對

して、仏教は、ぜひとも発言していかなければならないと思っています。

私たち医療者は、人間の苦悩を救ううえでどこで関わっていけるのか。自分にできることとできないことがあり、もしできないとするならば、チームを組み、各人の役割を果たしていきながら、一人ひとりの苦しみを救うという取り組みが必要です。医療と仏教が協力をするという課題のなかで、いろいろな方向性が見えてくるのではないかと思います。

■ 生死を超えて生きる

お念仏に出遇うということなしに、「生死を超える」という問題の解決はないと思います。いまの一瞬に、質的に「無量寿」と通じていることを感得することが大切ではないでしょうか。それは、南無阿弥陀仏という世界に摂取不捨（せつしゆふ）されて生きることである、と真宗では教えているのではないかと思います。私たちは、単にいのちの量的な長さを延ばすことだけを願っているのではなく、本当は、いのちの長短にとらわれない世界を求めていることを、本願をとおして教えていただくのだと思います。

では、「生死を超えて生きる」とはどういうことなのか。細川 巖（いわ）先生は、「人生を結論とせず、人生に結論を求めず、人生を往生浄土の縁として生きる。これを浄土真宗という」「私たちは、人間として生まれて、いま、ここで生かされているという世界が見えてくると、人生におけるいろいろな出来事はすべてが私を人間として成長させ、成熟させる縁であったといただけます。ヒトとして生まれたものが人間に成っていき、ついに人間に成り切って完成した人間と成っていくのです。すなわち、仏に成っていく歩みが、私たちのこの人生なのです」という言葉を残してくださいました。

いままでは、世俗的価値判断で結論づけて、「成功だ」「失敗だ」「勝ち組か」「負け組か」と振り回されていたけれども、それらが全部、自分に必要なこととして配置されていたことなのです。そのことを受け取ることをとおして、

人間に生まれながらも人間に成れておらず、餓鬼（うきょう）、畜生（ちくじょう）を生きている私たちが、この世でいろいろなことを経験しながら成長して、ついに人間に成っていくのです。そういう歩みが、生きるということの意味だと思っています。

私は、医療と仏教の両方に関わりながら、医療と仏教は、生・老・病・死という同じ課題を担っているのであるから、協力関係が必要だと思っています。そうすると、やはり、医学部や看護学教育のなかで、仏教的な素養を教える機会がどうしても必要ではないかと思います。

生・老・病・死に関わる医療や福祉の分野に、仏教的な素養をもつ人物を育てていく取り組みが欠かせないことを感じています。また、一般の方々にもそういう問題が大事だということとを共有できる文化が育っていないと、僧侶や医師ががんばっても何もできません。spiritual という問題の大事さ、物語の大事さを共有できるような文化を育てていかなければならないと強く感じています。（文責：親鸞仏教センター）

※田畑正久氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第12号（6月1日号）に掲載予定です。

田畑 正久（たばた まさひさ）佐藤第二病院医師
1949年、大分県に生まれる。九州大学医学部卒業。同大学病院、国立中津病院を経て東国東広域国保総合病院院長を10年間勤める。飯田女子短期大学客員教授。医学博士。1990年「国東ビバーラの会」を組織し、医療と仏教の協力関係構築に取り組む。現在、大分県下、数力所で「歎異抄」に聞く会」を主宰。著書に『生と死を見つめて—医療と仏教が共にできること』（東本願寺出版部）、『老・病・死の現場から』（法蔵館）など多数。また、『アンジャリ』第9号（親鸞仏教センター）に「医療は地域文化—医療と仏教—」を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

親鸞仏教センター研究員と読む——公開輪読会

「いま新たに聞く—ブッダ・法然・清沢満之の世界」 参加者募集中!

今年度の公開輪読会（連続12回）では、「いま新たに聞く—ブッダ・法然・清沢満之の世界」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員といっしょに仏教の『聖典』をひもとき、自己とは何か、人間はなぜ悩むのか、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教のことに、現代を生きる力を見いだしていきたいと思えます。皆さまのご参加をお待ちしております。

（以下の詳細は、日程順です）

■清沢満之——我が信念（全4回）

今年度は、明治の仏教者・清沢満之が、仏教の他力思想（他力門哲学）について究明した論考を読む。清沢の厳密な思索を学ぶことをとおして、親鸞の本願他力の教えについて尋ねていきたい。

テーマ：『他力門哲学』の論文を読む

日 時：2006年11月30日（木）、12月7日（木）、13日（木）、20日（木）

いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：伊東恵深（いとう えしん）研究員

資料代：500円（4回分）

■真理の探究——ギリシア人と仏教僧との対論（全4回）

紀元前150年頃ガンダーラ地方を支配し、歴史的に実在した人物であるインド・ギリシア人の王メナンドロス（パリー語でミリンダ）と、仏教僧・ナーガセーナ長老との問答の記録であるパリー伝『ミリンダ王の問い（ミリンダパンハ）』を読む。二人の問答を手がかりとして、仏教における無我論、修行論、ブッダ観などについて尋ねていきたい。

テーマ：『ミリンダ王の問い』を読む

日 時：2007年2月7日（木）、14日（木）、21日（木）、28日（木）

いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：羽塚高照（はづか たかてる）研究員

資料代：500円（4回分）

■法然——念仏ひとつ（全4回）

昨年度に続き、『選択本願念仏集』第二章から読み進め、なぜ称名念仏なのか、その選びのもつ意味について確かめてみたい。また、そのことによる社会的な影響（民衆の支持と法難等）についても考え、法然が明らかにした世界を尋ねていきたい。

テーマ：『選択本願念仏集』を読む

日 時：2007年3月7日（木）、14日（木）、22日（木）、28日（木）

いずれも午後6時30分～8時30分

担 当：嵩 海史（かすみ ひろし）研究員

資料代：500円（4回分）

■申し込みと問い合わせ

参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。参加費は無料ですが、資料代をご負担願います。定員35名。途中からの参加も可。

親鸞仏教センター公開輪読会 下係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

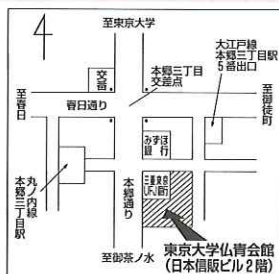
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp

■会 場

東京大学仏教会館2階ホール

（本郷三丁目・日本信販ビル2階）



東京メトロ丸の内線「本郷三丁目」駅徒歩3分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩1分



昨年度の公開輪読会の風景

あ と が き

親鸞仏教センターが設立されて5年の歳月が経った。この間、親鸞の思想・信念を現代に開いていこうと、さまざまな活動を行ってきた。その試みの一つが、『歎異抄』現代語訳の研究である。『歎異抄』を現代語訳することには、非常に難しい問題がある。本多弘之所長は、この課題について「言葉は、その言葉が長い間もっていた世界観や人生観や仏教思想などと絡んで成り立っている。また、科学的な世界観が、圧倒的に現代人を説得する時代になっているなかで、現代にしか通じない言葉に置き換えて果たしていいものかという問題がある。特に、文学系統で言葉に強い執念をおもちの方であれば、『置き換えることは無理だ』『置き換えることは学問的ではない』という抵抗がある。しかし一方で、『当時の言葉そのままであれば、現代の人間には何のことかわからないではないか』という問いかけもある。そういう意味で、どういう方向性をもって現代語訳を考えればいいのか、われわれ自身、日々、繰り返し対話しながら歩んできた」（『現代と親鸞』第10号趣意）と述べている▼この『歎異抄』の研究を主宰し、本紙『歎異抄』の試訳を担当してきたのが嘱託研究員の武田定光氏である。残念だが、7月末日で退任された。氏を中心に、研究員が共同で『聖典』の言葉の現代語訳

に腐心しながら、「共同の個性」というものが生まれてくる喜びを共有してきた5年間でもあった。氏は本紙『聖典』の試訳欄のリードで、現代語訳をすることの難しさを、「ごく限られた現代の『個』の実感から『普遍』へと共鳴する言葉を模索することも無意味ではない」（第9号）と記している。いよいよ『歎異抄』の現代語訳の本紙への掲載が次々号をもって終了することとなる。この紙面を借りて、氏に感謝の意を表したい。なお、9月から、『唯信鈔文意』（現代語訳）研究会を新たに発足した。その成果についても広く読者に公開したいと考えている▼昨年度に続き、11月から3月（連続12回）にかけて、第2回「親鸞仏教センター研究員と読む—公開輪読会『いま新たに聞く—ブッダ・法然・清沢満之の世界』」を開催することとなった。研究員が自身の研究課題を首都圏のサラリーマンや主婦、学生の参加者と共に、公開された場で発表し、討論することの意味は大きい。仏教思想を現代の言葉で、現代を生きる力となる表現を紡ぎ出してほしいと願っている▼真宗大谷派も主催者として参画した「鈴木大拙没後四十年記念展」の最後の会場である大谷大学博物館（京都市）での開催も、去る11月28日、成功裡に終えた。鈴木先生ゆかりの地である鎌倉市・金沢市・京都市の三市で、大変多くの皆さまにご覧いただき、あらためて御礼申し上げることである。（長谷岡）